
異世界征服作戦

滝田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界征服作戦

【コード】

N9903Q

【作者名】

滝田

【あらすじ】

近未来、世界が各国家によって統一された地球
進む科学によって異世界に行けるようになり
地球人は異世界に侵攻し始めた――

近未来兵器 V S 魔法（前書き）

こんにちは 滝田です

今回初投稿になりましたこの作品をお読み

いただけましてありがとうございます

この小説が終わり次第また違う物語をつくらうとおもいます

追記 私は異世界や最強、チートの物が好きです

近未来兵器 V S 魔法

20xx年 地球はアメリカやロシアなどの国家によって統一された

そして、ついに人類初の異世界征服作戦が実行された

そしてここは機密施設、この中に呟く人がいた。

最高司令官「やっとこの23年を諦めずに頑張ったかいがあった」
そして司令官は、不気味に笑った。

～異世界～

S I D E ロム

俺は ロム レクエイム

いま剣の手入れをしている

最近は何騒になった、わがエイム大国が近くの帝国に宣戦布告したからだ。

ロム「なんで戦争すんだよ、」

ロムが呟く。

近未来兵器 V S 魔法（後書き）

2	2
0	0
1	1
1	1
4	3
/	/
9	2

誤字二文字修正

侵略準備(前書き)

これからもユックリして行ってね!!

侵略準備

俺はアメリカ陸軍第37小隊 ジョン・エイムだ
これから異世界に行くための準備をしている。

場所は変わってここはブリーディング室

最高司令官「作戦は簡単だ、食料庫 弾薬箱 通常倉庫の建設。
その場の安全確保だ、あと現地人に見られたりしたらそいつを殺せ、
女子供でもな。」

兵「一般人を殺していいんですか!？」

最高司令官「別にいい、そこは異世界だぞ？」

兵「そんな!!それではただの虐殺じゃないか!!」

一理あるな・・・

最高司令官「勘違いするなルーキー、我々は遊びに行くのでは無い
あんた一人の命令無視でこの作戦が失敗したらどうするんだ」

兵「っ!」

最高司令官「もう良いな?それと向こうではキケンな生物がいつぱ
いいるからな」

サラリと怖いこといった!?

ブリーディングは終わった。

S I D E ロム

ロム「ふう〜終わった」

剣の手入れが終わった・・・

兵「失礼します」

入ってきたのは剣をぶら下げた兵士だった

兵「依頼がきました」

ロム「内容は？」

兵「はい、搜索依頼です。

薬草を採りにサバス森に入っていて戻ってこないようです。」

ロム「あそこは確か新道が出来たんだな（もちろんアスファルトで

はなくレンガである)」

兵「はい、旧道はもう手入れがされていなくて草が生え放題なのでそこで遭難したかと」

ロム「うゝむ・・・あそこには伝統部族であるフォーム村がいるんだよな」

兵「ええ・・・」

伝統部族 伝統を受け継ぐ部族、焼き物などが高く売れ、良く貿易するのだが

ジャリの道なので新道としてレンガ道を作ったのだ・・・

しかし、あの部族は好戦的で商人や旅人以外の人、兵や一般人を容赦なく切るのだ

しかも国境付近なので歩哨も出来ないのだ

トム「まあいい、すぐに出発だ」

兵「はっ」

そして搜索の準備を始めた。

侵略準備（後書き）

北海道人なので
方便が出でないか怖いですWWW

搜索

S I D A 少女

あたしはたしか薬草採りに来ていたはずなんだけど・・・
いきなり大きな猿に襲われたから逃げてきたけど・・・
ここはどこ？

ウイイイン

何か金属音がする

茂みの中から覗いてみた、いい人だったら助けてもらわないと

「そこに居るのは誰だ!!」

振り返ると緑色の服を着た兵士らしき人がいた

その手には黒い棒のような物を持っていた

S I D A ロム

私は今例の森に来ている

ロム「見つからないな」

兵「ええ・・・」

次の場所に行こうとしたとき

ズパーン

という音がした

ロム「行くぞ!!」

兵「はい!!」

音がした所に行くとな誰も居なかった
しかし……

ロム「……」

茂みから足が出ている
故意に隠したとも言える

俺はその茂みに近づき

茂みの中を見た

ロム「うっ」

吐き気がした

茂みには少女の死体が残っていた

いや、頭が吹き飛んでいた

そこらじゅうに血と臭いがたちこめていた

まだ魔物が来ていないから先ほどの音と関係があるのか

俺たちは少女の死体を埋めて

帰る支度をしていた

全員暗い顔をしていた

搜索(後書き)

ぐろくてすみません

異変（前書き）

ここから微グロ注意

異変

俺たちは一度城に帰って報告した

死体が荒らされていない魔物や盗賊の可能性は低いらしい
今後このような事が起きないようにしないと

次の日

フェム村との連絡が途絶えたのだ
村に行った商人も帰ってこないという

今回の事件と関係が有るのかな？

S I D E ジョーン

事件後のこと

今回は近くの村を襲う事にした

ジョーン「よし・・・」

手持ちの武器を確認した

しかし歩兵30人と歩兵戦闘車と主力戦車はやりすぎだ

そして作戦を開始した

「突撃！！」

声がした

その瞬間俺たち歩兵が動いた

村といつてもちゃんと堀があり門があるが

戦車じゃ足止めにもならない

戦車の砲撃により門が吹き飛んだ

村の人は驚いたがすぐに剣、弓、槍を持ち攻撃してきた

しかし攻撃は弾かれ機関銃 榴弾などでどんどん殺していった

首の無い死体 血を噴出すしたい

さらには榴弾によって内臓や血が四方に広がっている死体

しかし俺たちは ストライカー兵員輸送車の中にいるため攻撃がきかない

その時

戦車が砲撃して近くの家を破壊した

指揮官「武器を捨てて手お上げる！！」

村人は素直に武器をおいた

しかしこの言葉が通じるのか
こりゃあ楽だ

その後村人全員を拘束して仮設住宅に監禁した

この村を壊して滑走路を造るそうだ

さらにどんどん兵器 物資 兵士が異世界に来ている

石油が有る場所もあるので、施設を作れば輸入物資を減らせ、もっと武器を運べるようになる

滑走路は10日ほどかかるらしい

それと・・・

こちらの設営地点を覗いていた少女をその場で処刑したそうだ・・・

逃亡（前書き）

更新頑張って逝きたいです

え？字が違う？

大丈夫だ 問題ない

逃亡

S I D E ヘレン

私は第二女性攻撃魔法師部隊（20人）に所属する ヘレン・M・
ネクタリスだ

私は今伝統部族の村に来ている

奴らは自分の危険が迫った時のみ国に依頼しているのだ
まったく自分勝手な村だ・・・

それは置いておいて私は今移動の時の疲れを癒し、明日の依頼の準備をしていた

温泉に入り濡れた髪を魔法で乾かし終わった時表で大きな爆発音がした。

村人「敵襲だー！！」

ー
そんな声が聞こえる

私は先頭に立ち杖を持って宿から飛び出した時。

ズドーーーーーン！！！！

私ごとびだした宿が謎の兵器によって破壊された。

「全員武器を捨てるー！！」

村人は武器を捨てる

私達もと後ろにいるだろう仲間に向けてと……

全員死んでいた……

いや、ただの死体ではなかった腹部に大穴がみえていた……

ヘレン「あああ・あああああ」

気づけば私は無我夢中に逃げていた

後ろから謎の黒い銃？で攻撃してきた

そのうち数発が私の肩辺りに被弾した……

幸い鎧を付けていたため喰い込んでいたが貫通したり
体内に留まったりしていなかった

それでも激痛なので止ろうとしたが体に鞭打って走った

止まったら捕まる . . .

止まったら殺される . . .

そう思い走った

王都に向かって

逃亡（後書き）

グロイ？

王都にて（前書き）

更新遅れました！！
すみません！！

王都にて

ヘレン「ハア・・・ハア」

町に馬を置いてきてしまったので徒歩だ。

途中で応急処置をして弾を取り出し（すごく痛い！！！！）
止血をしたので王都まで明日には着くだろう。

次の日

王都についた私はそのまま意識を失った・・・

ヘレン「う・・・ん」

????「気がつきましたかな？」

この声は・・・

ヘレン「国王様っ！！」

飛び起きた私は激痛によって
顔を歪ませる
ズキン！

国王「まだ安静にしてなきや」

ヘレン「う……」

国王「いや……ね、君が来て門番に名前聞こうとしたら
突然倒れたそうだ、鎧から血が溢れていたから回復魔法を施したん
だよ」

国王「それでヘレン殿、そなたほどの者があんなにケガを負うとは
何が有ったのですかな」

私はあの事を国王に話した

国王「村が奇襲に会い、反撃するも謎の攻撃により仲間も死亡です
か……」

ヘレン「はい……」

その後疲労が出てきてまた意識が闇の中に溶け込んだ。

D I D E ジョーン

その後村を護衛して今後の作戦に備えた」

S I D E O U T

オリジナル兵器 〱 搭乗兵器集 〱 (前書き)

これは、作者が考えた(妄想した)兵器です、名前も適当で
実物の兵器、国家とは何ら関係ないのであしからず

オリジナル兵器 く搭乗兵器集く

MS - 337

ミサイル戦車の発展形、ミサイルBOX式であり
1段8発、上下4段、計32発の対地、対空両用ミサイルを搭載する。

さらにM21重機関銃を搭載する

対弾、対爆発物多用戦車

横幅が長く、前方に幅2mの対弾強化アクリルが4重のシールドを前方に展開し、歩兵を守る

シールドには種類があり、市街戦用、簡易バリケード用、上部シールド用が有る。

市街地戦用は、狭い場所で、盾の横幅を削る代わりに、対奇襲用に盾がリーチ状に

なっていて、横からの奇襲に備えて、さらにアクリルを6重にして、RPG-7の対策もしている

簡易バリケード用は、設置式で、道幅に合わせて、調節できる

上部シールドでは、ビルなどでの上からの攻撃を無効化する、高層物の少ないこの世界には、必要ないかも

交渉

3月7日 月の日

今回、アメリカと周辺国と国交を結ぶ事になった

そして外交団が王宮に入って行つた

外交員達は、接客室に案内された

外1「話の通じるひとがいいなあ・・・」

外3「そうだな」

外2「無礼な事はするなよ

ここでは何時俺らの首が飛ぶか分からんからな」

他「ひえ〜」

そんな事を話していると、ノックとともに兵士が数人入ってきて
その後ろに王はいた

外交団は深く頭を下げ、挨拶をする

王「そんなに固くならんくてよいぞ」

その後、アメリカの事を話し、（もちろん、征服の事については、話さない）

王「そうかそうか、あんたらは異世界人なのか？」

外1「は、はい・・・」

部屋内の雰囲気はずん、と重くなる

王「すまないがのう、この世界では、異世界人は悪魔と言われているのじゃ、

だから、あんたらの事は、助けない」

衝撃であった

外交団「そ、そんな」

皆の分かっていた、悪魔を助けると、民衆から反発が上がる・・・と

王「いや、逆に滅ぼす」

外「は!?!」

喋り方が最初と全然違う

王「戦争じゃ!?!こいつらの首を奴らに送ってやれ!?!」

そう言うと王は魔法で、どこかに行ってしまった

その後に武装した兵が襲ってきた!!

外交団は、護身用のグロック19で反撃し、王宮内で交戦しながら
脱出、救援要請で
助かった

この事件は異世界で大ニュースになった

「恐るべき『悪魔』に宣戦布告!？」

「悪魔の外交団、捕らえること出来ず」

などと書かれており、大騒動になったが

国民はそんなに気にしていないようだ

が後の悲劇になる事も知らずに。

この事件

市街攻略（前書き）

連載はじめました

市街攻略

〔異世界米軍支部〕

ここからは、米軍海兵隊隊員の視点でいきます

隊長「今回異世界攻略のために結成された部隊隊長に選ばれた
ロクサスだ、」

隊長の命令で整列した隊員の横を通り過ぎながら喋っているのは
隊長であるロクサスだ

俺の名前はアラドだ、海兵隊所属である

隊長「では、番号と名前を言え!!」

「イエッサー!! 1番の(略)」

隊長「次!」

「イエッサー!! 7番のアラド!!」

隊長「次!!」

〔略〕

俺の部隊は30名で行動するようだ

〔仮説基地 ブリーディング室〕

隊長「まず、敵都市を無力化する、相手は弓、剣、槍で武装してるが、油断するなよ、
相手は魔法を使う「メイジ」と言う奴がいるからな気おつけろ」

〜略〜

隊長「最初の作戦だが、訓練した自分の腕に頼れ！！
自分の命と共に戦う銃に気持を掛けて手入れをしろ！！」

「「「サーイエツサ！！」」」

作戦はこうだ

? 12 : 00 他部隊が周囲から砲撃する

? 敵が反撃してくると応戦(この時、反撃がキツイ、他部隊が壊滅したら、砲撃要請をする)

?、?の要領で、自分の部隊が、兵員輸送車ストライカーで突入する

・・・こんな感じである

現代戦では、こんな簡単な作戦は組まない、相手文明の低さを利用した作戦である

〈町〉

この町は内政が良く、活気に満ちている。

・・・まさか、ここが血の海になる事は、誰も思わなかった

そして、昼過ぎ

広場にもっとも人が集まっている

そして・・・

ドドン・・・・・・・・・・ひゅ~~~~~~~~ズドーン!!!!!!

突然の砲撃で広場の人々は一瞬言葉を失った
そして広場は静かになった・・・

しかし、それも数秒程度

すぐに混乱と悲鳴が町を襲った

村人1「おおい!!!城門が壊されてるぞ!!!」

村人2「おい!!!兵士がケガをしているぞ!!!運べ!!!」

村人3「あ、足がああああ！！潰れてるうう！！！！助けてくれ！！」

兵士1「何事だ！！」

兵士2「町が攻撃されている！！」

兵士3「通信兵！！」

魔法通信兵1「こちら北城門パトロール！！北城門が無力化されました！！すぐに応援を！！」

魔法通信兵2「こちら東城門！！敵の攻撃が！！応援・・・？、ひゅ
ううう・・・ズドーン！！
ザザアーーーー・・・」

～総領官邸～

総領「な、何が起こっているんだ！？」

副「敵の攻撃です！！攻撃者、敵数、不明です！！」

総領「各城門に望遠魔法を付けていただろう！！敵数が分らない？
！」

副「即ち北、東城門は壊され、各城壁にも大穴が！！」

総領「伝書鳩で王都に報告！！兵士で応戦するんだああ！！」

く北城門く

米軍通信兵「作戦どおりです、思ったより、敵の反撃は小さいです

前線通信兵「ズドドドこちらドンA班・ズガツズドドド負傷者無し
ズドーン」

視点アラド

ついに、俺の部隊は、まだ無傷の南城門から、突入する

隊長「全員死ぬなよ!？」

「「「サーイエッサ!!!」「」」

ストライカーのエンジンが掛り、前進しだし、みんなの体がGによつて、傾く

一応、ストライカーの上部には、車内から操作できる機銃が取り付けられている

そして一気に加速して城門に突っ込んだ

そのまま前進を続けた、途中、南城門から脱出しようと走ってきた市民を轢き殺し、

武装している人物は、機銃で周りの市民と一緒に八手の巣にした

・
・
・
・
・
・

.....

（一時間半経過）

ついに敵は降伏（皆殺しだが）

市民も一か所に集めた

彼らは強制労働されるだろうが・・・

しかし、死体の片づけもあり、終わったのが、夕方、一般の温泉を借りて（もう経営者は捕えられたか殺されたか・・・）

夕飯も豪華な物（くどいが戦利品）

寝るころにはもう月が昇っていた

「・・・寝るか」

こうして、短いようで長い一日が終わったのである

市街攻略（後書き）

少し、詰め込みすぎたかな・・・

事後

（城）

「どういつ事だー!!」

「連絡はまだか!？」

「偵察兵が、帰ってこないぞっ!!」

現在、緊急会議中である、いきなりの、味方都市からの救援要請、しかし、その後の連絡は無し、救援は、危険すぎると判断し様子見、まあ見捨てた訳だが・・・

王は困っていた、都市が多いため、そんなに気にすることも無いし、モンスターの侵入なども多々ある

しかし、救援要請は、何年ぶりだろうか、その後の連絡が無いので、敵を倒したか、都市が崩壊したか
だ、なので、偵察兵を出したが、帰ってくる事は、無かった。

やはり、救援部隊を派遣すべきか、王が考えていた時、扉があいた

「よう!!元気にしていたか？」

「ゼア、王様の前よ!!って何回言えば分るのよ!!」

「それよりルーシー、あんたも十分うるさいよ、そう思うだろ?」
「ア」

「っ……っ」

「……」

大きな声であいさつして来た赤色の髪と燃えるような紅眼をした男性、ゼアと言ったしい

その男を黙らせようとしている黄色い髪をヘアピンで止めた可愛い

く、
黄眼をしているルーシーと言っらしい、

それを冷ややかに見ている人は色を抜いたような白い髪に見たものを凍らせると思わせるライトブルーの色をした女性、リアと言っらしい

「おお、ルーシーにゼア、リア、よく来てくれた」

王が挨拶する、そう、彼がゼア達を呼んだのだ、実に会うのは数年ぶりだろうか。

「君達に話がある」

整備

視点（工兵員）

俺の名前は「アグロフ」非戦闘員である。

工兵には様々な種類がある

色々上げてみると

・戦闘要員

こちらは、工兵を代表とする、戦闘員。
主に重火器を扱う

・戦闘整備

戦場での、戦闘中での応急的な修理を施す。
敵部隊と遭遇すれば、戦闘もする

・整備

戦闘整備に、似ている、

こちらは、戦闘前、戦闘後に修理、応急的修理を行う

・工兵車両部隊（作業部隊）

こちらは、車両、重機などを使用し、

・地雷除去・道路を設置、破壊・砲台設置、破壊、トーチカ設置、
破壊・瓦礫除去・etc・・・

一応、車両には機銃が取り付けられているが基本、戦闘は行わない
尚、俺はこの部隊に所属している

・・・ざっと上げるとこんな感じである、もっと分担して行つ部隊
もあるが、ここでは省く

俺は先日制圧した町を破壊、軍事基地にする予定だ。

ポータル（地球と異世界を結ぶ空間）から、王都への補給&修理、
前哨基地としても使用する。

地球の数十倍の面積を有するこの異世界（まだ名前が分らない）を
制圧するので、数十年は、掛るだろう、しかし、資源がすぎすぎる、
地質調査では、地球より石油が多い土地がいくつも、広大に広がっ
ているそうだ、しかも地球の数十倍・・・後、人類は一万年くらい
は、楽出来るだろう。

おっと、そんな事より自分の仕事をしなければ、数百人規模の都市
に、工作車両80台、特殊作業車両が30台に、工兵が3000人は、
凄すぎる、早くこの都市を軍事基地にしたいのか、この数だと、
10日もすれば、軍事基地の出来あがりだな。

基本的に、弾薬庫、ポータルへの道、鉄道の中継地、無線発信、簡
単な攻撃に耐えうる隔壁、
セントリーガンでの簡単な攻撃（向こうでは致命的なダメージ）を
与える場所の確保

・・・こんな感じである、次回では、いよいよ整備が始まる

・・・え？なぜ今書かないかって？作者の気力が0になったからさ
！（え

整備（後書き）

次も頑張る

偵察

S I D E ゼアグループ

一週間後 3 / 14日 月の日

11:00

（軍事基地（旧都））

ゼア「……一体何があつたんだ？」

ルーシー「……分らないわ」

ゼア「死体はないが、大量の血痕……片づけたのか」

それぞれ、まだ状況が掴めていない、いや、当たり前だ、地面に残る赤褐色の血、何かが爆発したのか、小さなクレーターが、あちこちに、昔使用されていた
隔壁は、ほとんど原形を留めていなかった。

そして、その数十メートルに町 否、軍事基地が建つて
いた

3人とも呆然としていた、しかも、もう日付が変わる時刻なのに、
すごく明るく
巨大な基地だ

リ「……門番はいない……見慣れない物があるな」

そう、歩哨はいなく、セントリーガンが2台、新しい隔壁に3台設置されていた

特徴は三脚みたいな物の上に四角くて、先が細い、断続的に青い光が点滅していた

しかも、「それ」は、定期的なスピードで左右を見ていた

ル「・・・どうする?」

ゼ「どうするって・・・近づくぞ」

リ「・・・背の高い草が生えている所から行きましょう」

・・・彼らは知らなかった、「それ」は、赤外線センサーな事を

彼らは「それ」に残り10メートルを切ったところで、「それ」に変化が起こった

今まで定期的に動いていた「それ」は、ある方向を向いて止った

彼らの方向を向いて

青い点滅は、黄色い点滅に切り替わった、それを皮切りにすべての「それ」はこちらに向いた。

S I D E セントリーガン

〔G U N 1〕 . . . 約10M先に生体反応 制止プログラム起動

制止プログラム起動 〔内容〕 制止 報告 各指定範囲の同機器
への〔連携プログラム起動〕

. . . 制止開始

S I D E O U T

G 1 「前方の味方外の人間に告ぐ、そこで手お上げ、待機せよ、繰り返す. . .

ゼ」どつする!?!?」

ル「突破するわよ！！」「ファイア」

彼女の手から、サッカーボール程の炎が現れ、それはGUN1に向かっていく

「ドン」と、音がしてGUN1が倒れた

S I D E O U T

S I D E セントリーガン

「GUN1」エラー検出 「内容」 姿勢異常 温度急上昇
制止プログラム内にてこのエラー内容は想定されています 「内容」
警告無視 敵対行動

想定内のエラーにて自動起動するプログラムが確認されました

プログラム名

「射撃プログラム」 起動開始

起動完了 「内容」 敵位置確認 各指定範囲の同機器への射撃命令
セーフティー解除 射撃

敵位置確認 失敗 エラー内容 「内容」 赤外線カメラの損傷 姿勢異常

各指定範囲の同機器への射撃命令 成功 送信中……………
……………送信完了

セーフティー解除 失敗 エラー内容 「内容」 異常温度
暴発の危険性が50%以上 姿勢異常

敵位置確認できず

射撃 失敗 エラー内容 {内容} セーフティ解除に失敗
又はシステムエラー

本体射撃命令解除 システム全エラー 強制シャットダウンします

・・・この間数秒

S I D E O U T

他の「それ」が火を噴いた

今度は、黄色点滅から赤色になり、点滅しなくなった

ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

銃声が響く、3人は防御障壁を構築した

障壁のおかげで銃弾が止るが、すぐに止った銃弾で前が見えなくなり、更にヒビが入ってきた

ゼ「逃げるぞ!!」

3人は障壁を作りながら撤退した

次話へ続く

絶対防衛ライン

まず、米軍が決めた防衛ラインを決めた

米軍はこの前占領して基地を建てた場所から30キロ先を第一防衛ライン

10キロ先を第二防衛ライン30キロ先を第三防衛ラインそして基地を絶対防衛ラインである

第一防衛ラインでは、歩兵など必要に応じて戦闘車両を支給する

第二防衛ラインでは、歩兵の量を増やし、砲兵車両（野砲、自走砲）対空砲、対空ミサイル、トーチカ

第三防衛ラインでは、主力戦車100台に戦闘ヘリ、第一、第二防衛ラインの装備に絶対防空網

絶対防衛ラインでは、対地よりも対空を意識している、対空砲にミサイル地上には野砲と機銃で対応する、尚、空軍基地はこの周辺に
いある

緊急防衛ラインはポータルである、つまりここを落とされたら米軍の負けである・・・

まあ、突破出来るなどないのだが

第一防衛ラインでは、時々小競り合いがあった、戦争状態の敵軍と「ちよつと見てみたい」と言うバカぐらいである

SIDE 米兵

3月24日 AM9:14 木の曜日 第一防衛ライン

米1「ふう・・・」

米2「寒いなあ・・・」

米3「だな」

今、俺達はいつものメンバーで持ち場で焚き火で暖をとっていた
雪どけの香が鼻を通る

ああ、こんな気持ちは数年前の日本に研修と言う名の旅行を楽しんだ、北海道に配属され、毎日楽しく、クリスマスでパーティーに出たよなあ・・・また行きたいな・・・

そんな時、頭の上に雪が落ちてきた、俺は雪の断面に座っていたから上から雪が落ちてきた

米2「どうした？」

米3「何かあったのか？」

するとちょうど先ほど雪が落ちてきた真上から声がした

米4「て、敵兵がこちらに!!！」

米2「また少数だろ」

米4「そ、それが、数えただけで2万人程が」

米3「何!？」

米4「こちらに!!！」

米4が走りだし、他の兵が俺の上をジャンプして小さな断面を飛び

越えた、そして俺の体が雪に埋もれる

米「……………」

俺は無言で銃を持ち後を追った

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドド
と音がする

「ぐわぁー!!」

「ギャー!!」

「グへ」

どンドン敵を倒すが、兵士の波が止まらずこちらに押し寄せる

米兵は無線で緊急事態を知らせ武器、弾薬を持ち（食糧は諦めた）
なるべく敵に略奪されないようにして、トラックに乗り込み脱出した

第一防衛ライン陥落

3月24日 AM10:13分の時だった

絶対防衛ライン(後書き)

更新遅れました!!

突破

3月24日 10:30 木の日

トラック内 米兵

前回第一防衛ラインにいた4名の名前は

米兵1 アルチヨム

米兵2 サム

米兵3 セイパー

米兵4 マックス

である、運悪く輸送部隊の護衛のためにこの4名しかいなかったのである

3月24日 10:50 木の日

第二防衛ライン

トラックが第二防衛ラインに着いた時、砲撃の轟音が聞こえた、待っていてくれたんだろう

その後何度か砲撃した後、中距離攻撃に切り替えた。

ブローニングM2重機関銃などで（命中率は悪いが敵が多いので）
どんどん敵が減って行く

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

3月24日 10:50 木の日

道 ジョン

はっきり言うとふざけるな

まず、敵の領土に入ったと思ったら前列の半分が死んだ、その後敵は謎の馬車で猛スピードで逃げた
あんなスピードは見た事も無かった

その後進軍を進めていると。

ドドン・・・ひゅ~~~~・・・ズガン！！

と地響きがしたと思ったら顔に何か張り付いた
確認すると焼け焦げた肉片だった、吐き気がした
その後地響きは続き、我が兵士の士気が大幅に減った

そして敵が見えた所で「ダダダ」と銃声が出て兵士が倒れていく
段々、自分の列が近づいてきた、怖い、ただそれだけだった

怖い、怖い！怖い！！いやだ！！死にたくない！！

遂に自分の列が先頭になった、その時死体に足を踏き転んだ、ベシ
や、と血だまりに顔から突っ込む

目に血が入らないように反射で目を閉じたが、口の中に血が入った、
生臭くて、鉄臭い

その時ジョンの精神が限界になり、血だまりから少し這いつくばって
乾いた土の上で気を失った。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

3月24日 11:13 木の日

第二防衛ライン アルチヨム

・・・終わった、僅かな敵兵は逃げて行った

その後生存者を捜しながら死体を片づけた

数名、死んだふりをしたり気を失っていた（死体を焼却していた時に火達磨になりながら出てきたものもいた、もちろん助けたが）

生存者を回収した後、自分の持ち場に戻った

突破（後書き）

新規小説始めました

転生物語

x / <http://ncode.syosetu.com/n4697>

海戦 1

王国との衝突から数日経った、占領した都市の近海を飛んでいた哨戒機が

王国海軍の大艦隊が迫っていると報告を出した。

軍部の最高司令官はすぐに空母打撃群を向かわせた

この数時間後世界初の海戦が始まるのだった

3月28日 12:00

元王国領元王国都市近海

王国海軍

第一級魔法戦艦 - 3船

物凄い量の魔法兵器が搭載されたこの艦隊の一番強い戦闘艦
超長距離攻撃から近接攻撃、対ワイパーン攻撃まで行う

第二級魔法戦闘艦 - 5船

第一級の前方に固まっている、主に長距離〜中攻撃攻撃を行う

第三級魔法対空支援艦 - 8船

主に対ワイパーン戦闘を行い、竜やワイパーンを専門に攻撃を行う、
対艦攻撃は無理をすれば対空用の砲で攻撃は出来るが、威力は期待
できそうにない

魔法上陸船 - 20船

敵領に上陸して地上部隊で制圧する、申し分程度に対空魔砲が仕掛
けられている

魔法戦闘支援艦 - 3 船

第三級より小さく、様々な任務行う

竜母 - 3 船

空母的存在、ワイパーンを発進させる事が出来る、上陸艦よりはま
しな対空魔砲が設置されている

計42船の大艦隊であつた

いっぽう米海軍の戦力は・・・

ミニッツ級原子力空母

アメリカ主力の原子力航空母艦、

戦闘攻撃飛行隊×1個(14機)

F/A-18E

戦闘攻撃飛行隊×1個(14機)

F/A-18F

海兵戦闘攻撃飛行隊×2個(24機)

F/A-18C

電子攻撃飛行隊×1個(6機)

E A - 6 B

早期警戒飛行隊×1個(6機)

E - 2 C

艦載輸送飛行隊分遣隊×1個(2機)

C - 2 A (R)

対潜ヘリコプター飛行隊×1個(8機)

S H - 6 0 F / H H - 6 0 H

を搭載できる

タイコンデロガ級ミサイル巡洋艦
イージス艦である

アーレイ・バーク級ミサイル駆逐艦 2船
ミサイル駆逐艦である

ロサンゼルス級攻撃型潜水艦
原子力潜水艦で、いちいち空気を確保せずに潜航できる。任務は対
潜・対地・ミサイル攻撃である

サブライ級補給艦

戦闘支援艦とも言える、それ以外は言う事も無い

計6船の空母打撃群である

本当はもっと戦力を増やせるがポータルの数が足りずにイラク戦争
と同じ戦力になってしまった
・・・まあ、これでもチートだが

・・・いよいよ海戦という名の虐殺の幕開けだ！！

海戦 1 (後書き)

Wikipedia先生どうもっす!!

・・・正直反省はしているが公開はしている

海戦2

3月28日 1:38

王国艦隊 竜母 王国海軍提督

「ふっふっふ」

提督は笑っていた、米軍艦隊の状況を見て、僅か6〜7の艦隊でこの艦隊に何ができる。

「まずは敵に追尾魔法槍を打ちこめ!!」

提督は興奮しながら命令した

魔法槍は敵がいるだろう方向に向かって放つと、槍の魔力が尽きるまで飛び続ける、

誘導は魔法が特定の生物に指定したものを追尾する、ミサイルのよくなものである

それを数百打発ち込んだ

戦闘開始 スタンドードミサイル&20mmフラックスCIWS

対 追尾魔法槍

パシュパシュとミサイルを打ち上げる米海軍
そして数秒後、凄まじい爆発が起こった、

「撃ちもらしはc i w sで対応しろ!!」

ヴヴヴヴヴヴヴヴヴヴ
と独特な音がする

そして爆発音は消え去り海の小波の音だけが周りに木霊した

3月28日 1:40

王国艦隊 竜母 王国海軍提督

提督は笑っていた、魔法追尾槍が爆発した音と黒煙がここからでも分かる

提督は思った、今回の功績でまたキャリアアップ出来るとそこに無事な米艦隊を見るまでは

「なっ!!」

「提督!!上空に何かが!!し、指示を!」

「ええい!それは第三級が行えばいいだろう!？」

すると即ち第三級が対空魔砲を撃ちまくっていた、しかしその時一斉に第三級が爆発した

「・・・」

提督は口をあんぐりとしていた、確かに第三級は小さく、時々大破する事もしばしばだったが

こんなに一斉に爆発するとは、思っていなかった

そして今度は米艦隊から魔法槍が打ち上げられた

空を白煙で光が遮られる程だった
前方の第一級と第二級が爆発した

「・・・」

「じよ、状況を！」

「は、はい・・・」

第三級全滅

第二級が三隻大破・沈没一隻が中破です

第一級が二隻が・・・大破・沈没、一隻が火災

・・・他の艦は無事です

我が艦隊は・・・たぶん無事です」

「無事な訳ないだろおおおお！！」

そう叫び提督は指揮室を飛び出し海に飛び込んだ

「提督ーーーー！！」

「糞、あの糞親父g」

ズドーーーーン

結局火災になった艦から海に飛び込んだが、弾薬が爆発して皆死んだ
ほとんど生存者はいなかった・・・いてもほとんどが虫の息であった
・・・王国海軍の提督だけが無事だった

海戦3

3月28日 1:38

米艦隊

「レーダーに感、ミサイルです」

「全艦に報告せよ、これよりミサイルを撃墜する」

「了解!!」

全艦が追撃態勢になった。

指揮官は全艦で追撃を命じた

「全艦へ、これより我が艦隊は飛行物体を迎撃する、その後航空機と対艦ミサイルで反撃せよ」

「了解」「了解」

そして・・・

「迎撃開始命令が届きました」

「了解、SM-2 発射」

パシュー!!!パシュー!!!

そしてその数秒後に大爆発を起こす

「飛行物体を全機撃墜、これより敵に反撃する、ハーブーン発射」

「ミサイルの高度設定は、 高空巡航、で行きます」

「了解、発射します」

パシュ・・・シュパーー！

と、一度発射機から押し出され、その後ロケットが点火して飛んで行った

高空巡航は、高度を飛び相手の艦に着弾する、高度は空気抵抗が低く射程と命中率が上がる

しかし撃ち落とされる確率が高いが、そんな技術を持っていない相手にしか使えない戦術だ

すると相手艦の一番大きい戦艦が大爆発したー

一方潜水艦も、同じようにミサイルを発射した

第18話 事後処理（前書き）

更新が大変遅れてしまいました申し訳ありませんでした！！

サブタイトルに話数を追加しました

第18話 事後処理

3月28日 pm 10:45

米国異世界総合管轄省↳軍事科・事務部↳

「ふあ〜」

ここで一人頑張る青年がいた

彼はまだ、事務部こしに配属となった

あまり運動などより本や機械をいじる方だった

この総合管轄省は異世界側のポータル付近に建設された、とても巨大な施設である

他にもいろいろんな仕事に従事している

まだまだ見習いなので先輩みたいになれるように自主的に残っている

「ふ〜」

今日は大変だった、なにしろ海戦の報告書が山のように回ってきた、

- ・ 弾薬や食料の数や費用の計算と報告
- ・ 被害状況・・・なかつたが
- ・ 最終報告書の作成と決算
- ・ 今後の予定立て

先輩達もさすがに苦笑して机にしがみついていたが、さすがに疲れた様子なので

解散したのだった、意外と社員は仕事さえちゃんとしていれば基本いつでも帰れる

子供や介護のためは黙って見送ると言う暗黙のルールもあった。

青年は先輩達を先に帰して自分が残った、先輩達は心配してくれたが
丁重にお断りした。

その時山のように積んである書類の間からひよっこり知っている顔
が現れた

「頑張ってるわね、ねえ、コーヒーでも飲みませんか？」

透き通るような綺麗な声が聞こえた

「あ、シャルロットさん……」

「ホーリーでいいよお」

そう、彼女かこの部でたった一人の女性、
しかも超美形ときたものだ。

女性からも好意を持たれるほど（嫉妬もね）人気である

「分かった……コーヒーか、良いね、さっきから頭がボーとして
いたんだよ」

「あまり無理、しないでね？」

ああ、そんな純粹な眼で見ないでくれ、余計ボーとなる

パタパタと隣にある給湯室に向かった。

もうすでに此処（異世界）のポータル付近のインフラは完成していた
電気・ガス・電話、インターネットなど、地下にもう一つの専用ポ

「タルを発生させ、パイプなどを地球と連結させている。

水道などはその場でポンプとろ過設備で飲料水などを生産している、この水はとても綺麗で、生でも飲める（感染症が怖いのではない）が）ほど自然環境が良好だった

そんな事を考えていると、コーヒーも香りが漂ってきた

あ・・・だめだ、頭がさらにボーとしてきた

「zzzz」

遂に寝てしまった

「おまたせー・・・あら、寝ちゃっている・・・」

ホーリーは彼に毛布をかぶせて、しばらく彼の寝顔を、コーヒーを飲みながら鑑賞していた・

満足した彼女はそのまま寮に帰宅した

翌日先輩に起こされ泣く泣く書類に向かっていた・・・

いっぽう王城では艦隊の全滅を聞くと王が卒倒したそうなの

第18話 事後処理（後書き）

テストが近いのでまた遅れそうです・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9903q/>

異世界征服作戦

2011年11月17日00時17分発行